

松陰精神を活かせ

泉 賢司

Keep alive Syoinn spirit

Kenshi Izumi

はじめに

吉田松陰は天保六年(1830)、8月4日、現在山口県(長門)の国、萩市で氏族の次男として生まれた、父は、長州藩士で家禄26石の杉百合之助で、五才で叔父の吉賢良の養子となった。松陰の養父賢良は家禄57石の山鹿流軍学師範を世襲やまがかりゅうしており中級武士であった。幼少の頃から松陰の俊才ぶりは城下に知られ、19歳で家学である山鹿流軍学の師範を継承した、が、松陰は2世紀も前の山鹿流軍学がすでに時代遅れであることを見抜いていた。

寛永3年(1850)長崎留学、翌年の江戸遊学を機に、その核心はますます強くなり脱藩という行動にでる。藩の許可を得た者しか活動出来なかった当時、みずからの志に沿った学問をめざすには、禁止令を犯すしか手段はなかったのである。

そして、黒船来航で世界情勢を知り、危機感を強めていった松陰は、開国を迫る外国の軍隊にたいして、日本の歴史の流れもしらず太平をむさぼり、対応能力のない幕府に対して批判的になった。そして、世界をもっと知るために、安政元年(1854)にペリー再訪の際に、米国密航を企てて下田に行き、小舟を漕ぎ出して黒船に乗り込んだ。しかし、ペリーは松陰を受け入れなかった、そして、幕府に送り帰され、捕えられて藩地幽閉処分となった。

安政の大獄という強硬手段に打って出るにあたって、幕府は長州・萩の危険人物を調べていた。直接は梅田雲浜という人物との関係を調べる為だったが、最後は江戸に召還され処刑された。遺骨は小塚原に葬られたが、門人たちが引き取り、世田谷の若林に手厚く改葬された。現在の松陰神社の地である。

そして、松陰先生が亡くなられて天保元年(1830)年、85年後、大正8年(1919)年(柴田徳次郎(国士舘大学創立者)が松陰先生の人物・主義・思想に深く感銘され、本学を明治維新における松陰塾の如く、国家の先駆者とならん人物、即ち「国士」を養成する目的で、由緒ある松陰神社の畔を選ばれた。国士舘大学の校歌に、松陰の祠に節を磨し、という詩があるが、そういう意味で松陰先生の教えを実践しようとして出来た学園で、国士舘とは切り離すことは出来ない関係にある。

戦後、誤った占領政策で日本人であって日本人でない「外国人」が増えてきた。批判

と反対だけを繰り返す自己中心的な左翼主義者、自分の利益だけを追いかける政治家や成金主義者、日本人としての誇りはどこへ消えたのか。今こそ吉田松陰先生の思いを探求して、日本の若者達に受け継いで貰いたいと思う。

吉田松陰名言「訳川口雅昭」 人を信ずるに失するとも

そもそも知を好む者は多くは人を疑うに失す。仁を好む者は人を信ずるに失す。^{ふた}両つながら皆偏りなり。然れども人を信ずる者は其の功を成すこと、往々人を疑う者^{まさ}に勝ることあり。(中略)故に余る人信ずるに失するとも、誓って人を疑うに失することなからんことを欲す。

＊安政2年8月6日「講孟筭記」(山口県教育会館「吉田松陰全集」大和書房)

「訳」

だいたい、知を好む人は人を疑いすぎて失敗するものである。また、仁を好む人は人を信じすぎて失敗するものである。両ほうとも、かたよっているというべきである。しかし、人を信じる者はその結果は、人を疑う者にまさっていることがある。(中略)だから私は人を信じて失敗するとしても、人を疑って失敗するということがないようにしたい。

：人をだます事は、最も悪いことである、騙^{だま}される事も悪いが、人の道としては騙される方が、騙すよりまだましだという事である。

志を立てざるべからず

道の精なると精ならざると、業のなると成らざるとは、志の立つと立たざるとに在るのみ、故に士たる者はその志を立てざるべからず。それ志の在る所、^あ気も亦従う。志気の在る所、遠くして至るべからずなく、難くして為すべからずものなし。(中略)

苟^{いやく}も其の学を之純正にせざれば、即ち上は以て主心の非を格すなく、下は以て同僚の善を責むるなし。(中略)夫れ重きを以て任と為す者、才を以て恃^{たのみ}みと為すに足らず。知を以て恃と為すに足らず。必ずや志を以て気を卒る、びんべん事に従^なひて而^{しか}る後^{のち}可なり。

「松村文祥を送る序」

「訳」

人としての道が優れているかそうでないか、また、仕事が上手くいくかいかないかは、志が立っているかいないかによる。だから武士たるも者は志を立てなければならぬ。志があるところ、やる気もそれに伴って起こるものである。志とやる気さえあれば、いくら目標が遠くにあっても達成できないことはなく、またどんなに困難な状況

にあらうとも出来ない事は無い。(中略)仮にも混じり気のない正しい学問をしていなければ、主君の非を正すことはできず、仲間に善い行いを望むことも出来ない。(中略) 重大な責任を持って任務にあたっている者は、才知のみを頼りとするのでは不十分である。必ず志を立ててやる気を持ち、努め励むことでその任を果たすことが出来る。

*志を持って行動する事が、挫折しない道で上司にも部下にでも、間違った事があれば正す事ができる。

陰阻艱難程大業を成すに宜しきもの之れなき様存じ奉り候

足下年少才富み何事^{そっか}にても御志^{ごし}さえあれば、成らずと申す事は之れある間敷^{まじ}く候。若^もし是^これ式^{しき}の事に御鋭気挫^{ごえいきくじ}け候様にては、大業の創始^{とて}は逆も出来申さず候。(中略) 万一英気挫^{いにしえ}け候様の事ども御座候も、古^{けん}の英雄御覧^{そかんなん}成さるべく候。陰阻艱難程大業を成すに宜しきもの之れなき様存じ奉り候。(中略)本朝にても頼朝・尊氏・秀吉・徳川公の跡を見るに、皆艱難を経てこそ天下も定められ候。

*喜永3年9月29日「郡司覚之進あて書簡」

「訳」

あなたは年齢は若いが、才能に富んでおられるので、何事であらうとも、志さえあればならないということはあはありますがありません。もしも、これくらいの事で何かを成そうとするお気持ちが挫けるのであれば、大きな仕事を始める事などはとても出来ないのでしょうか。(中略)万一お気持ちが挫けるような事があつたとしても、古の英雄をご覧下さい。苦しいこと、困難なことがあるほど大きな仕事を成し遂げるには好都合だと思います。(中略)我が国にても、頼朝・足利尊氏・豊臣秀吉・徳川家康公などの足跡を見ると、皆困難なことを乗り越えたからこそ、天下も平定されたのです。

*喜永三年(1850)年二十一歳の松陰が、遊学中の平戸より、長崎遊学中の友人である郡司へ送った書簡の一節である。

*志を持って困難な問題に立ち向かっていく心が無ければ、大きな事は出来ないだろう。立派な人ほど困難を乗り越えて、名前を残している。

一心不乱になりさえすれば

人は一心^{いっしん}不乱^{ふらん}になりさえすれば何事へ臨^{りん}み候てもちつとも頓着^{とんちゃく}はなく、縄目^{なわめ}も人屋^{ひと}も首^{くち}の座^ざも平気^{へいけい}になれ候から、世の中に如何^{いかに}に難題^{くかん}苦患^{くわん}の候ても、それに退転^{たいてん}して不忠^{ふしゅう}不幸^{ふこう}無礼^{むれい}無道^{むどう}等^{ども}仕^{つかまつ}る気^きずかいはない。(中略)「長閑^{ながかん}さよ願^{のどか}いなき身^{かみ}の神詣^{かみもう}で」神へ願ふよりは身で行ふがよろしく候。

*安政6年4月13日「妹千代宛て書簡」

「訳」

人は一つの事に心を注ぎ、他の事のために心乱れると言う事がなくなりさえすれば、何事に臨んでも深く気にかけると言う事はなくなる。罪人として縄でしばられても、牢屋に入れられても、また、打ち首の場に座らされて、その刑に処せられようとしても平気になり、世の中のどんな難題や苦しみ・悩みに遭ったとしても、それで心がくじけて不忠・不幸・無礼・無道などの状態に陥ってしまう心配はない。(中略)「長閑さよ願ひなき身の神詣で(何の願ひもなく神社に詣でるのはのどかな事だ)」という言葉もあるが、神様に願ひをかけるよりも自分で行う方がよい。

*一生懸命になって、物事に当たれば惑わされる事はなく、悪い事も考えない。

師恩友益多きに居り

徳を成し材を達するには、師恩友益多きに居り、故に君子は公遊を慎む。

*安政元年2月「士規七則」

「訳」

人としての徳を身につけ、才能を開かせるには、恩師の御恩や友からの益が多い。だから立派な人は交際を慎むものである(滅多なことでは人と交際しない)

*あまり軽々に誰とでも付き合うなという事。

学は、人たる所以を学ぶなり

昨年余獄を免され、松下に家居し、外人に接せず、独り外叔久保先生及び諸従兄弟、時々過訪し、因って共に道芸を講究す。家巖・家叔と家兄と、又従って之れを奨励せらる。吾が族の盛大なる、蓋し将に往々一邑を奮発振動せんとするなり。初め家叔先生の徒を集めて教授せらるるや、其の家塾に扁して、松下村塾と日ふ。家叔己に官となり、其の号久しく廃せり。外叔己にして邑の子弟を会して之れを教え、其の号を欲用す、頃ろ余に命じて之れを記せしむ。余曰く、「学は、人たる所以を学ぶ也。塾係くるに村名を以てす。誠に一邑の人をして、入りては即ち孝悌、出でては即ち中信ならしめば、即ち村名これに係くるも恥じず。若し或は然る能はずんば、亦一邑の恥たらざらんや。抑々人の最も重しとする所のものは、君臣の義なり。国の最も大なりとする所のものは、華夷の弁なり。今天下は如何なる時ぞや、(中略)神州の地に生まれ、皇室の恩を蒙り、内は君臣の義を失ひ、外は華美の弁を遺れば、即ち学たる所以、人の人たる所以、其れ安くに在りや。

*安政3年9月4日「松陰村塾記」

「訳」

私は昨年、野山獄から釈放されて、松本村の実家に帰り、外部の人と接触しないよ

うにしてきた。ただ、母方の叔父である久保五郎左衛門先生や従兄弟たちが時々訪ねてきてくれ、一緒に人としての道を究め学んでいる。父上、叔父である玉木分之進先生、そして、兄がそれを推奨して下さる。私の一族の盛んな様はこのようである。よって、これから先、松本村すべての氣力を奮い立たせ、振るい動かそうと思う。最初、玉木先生が門人を集めて教えの場を開かれた時、その塾「松下村塾」と名付られた。叔父は今や官途にあり、その名前は長く使われていなかった。そこで久保先生が村の子供たちを教える際に、その名前をそのまま用いた。近頃私に命じられてこの間の状況を記録させた、私は次の様にいった。「学問は、人が人である、そのいわれを学ぶものである。塾名に、村の名前を用いた。松本村の人が家では孝行を尽くし、外では年少者が年長者によく仕えるようであれば、村の名前を塾名に掲げて恥ずかしくない。もしそのようにならなければ、村全体の恥になってしまう。大体、人にとって最も大事なものは、君臣の義、つまり君主と臣下の間の正しい道である。国家にとって最も大事なものは、華夷の弁、すなわち我が国と他国との別れるいわれ、つまり違いを認識する事である。今、天下はどんな時だろうか。(中略)日本に生まれ、皇室の恩を受けながら内では君臣の義を失い、外では華夷の弁を忘れてしまったならば、学問の学問たるいわれ、人の人たるいわれは、どこにあるというのだろうか。

*学問とは、人間が如何に生きるべきかを学ぶことである。

死友に^{し ゆう}負^{そむ}かず

程嬰・田横^{てい えい でん おう}の客・貴高^{かん こう}・此の緒人の死、死友に負かずというべし。死友に負く者、安んぞ男子と称するに足らんや、趙肥義^{ちよう ひ ぎ いわ}曰く、「死者復た生くるも、生者恥じず」と。これを謂ふなり。隨園詩話^{ずい えん し わ}に曰く、「無鬼論^{む き ろん}に憑りて、遂に託孤^{たつ こ}の心に負くことなかれ」と。此の句吾れ甚だ感ず。恥じず、負かず、是れ等の字面、真箇^{しん こ}に情けあり。

安政六年(1859) 5月22日「照顔録」

「訳」

程嬰(古代シナ春秋時代、晋の人)・田横(漢の人)・貴高(漢の人)これらの人々の生死は、先だった同志の忠節の死に背かなかったというべきである。先だった同志に背くような者を、どうして男子と称することが出来ようか。出来はしない。古代シナ、趙国^{ちようこく}の肥義は、「死んだ同志が生き返ったとしても、生き残っている者は恥ずべき生き方はしないものだ」といった。このようなことをいうのである。「隨園詩話」(清王朝袁枚著)には、「死んだ人間には分かりはしないなどとして、孤児を託した同志の心に背くことのないように」とある。この句に私は大変感じた。「恥じず、背かず」という文字には本当の情があるものである。

*同志が死んだからといっても、心は忠誠を尽くすべきだよ、死んだ人間は分かりはしないなどと思っはいけない。

心定めや、特に一旦憤憤^{ふんげき}激^よの能くする所に非ず

名君賢將必ず先づ其の心を定む。吾が心^{ひと}一たび定まりて、將吏士卒^{しょうりしそつ}誰れか敢^あへて従はざらん。(中略)然れども此の心定めや、特に一旦奪^う激の能くする所に非ず、必ずや心胆^{かんやうたんれん}を涵養鍛錬^{もと}すること素あるものにして、能くすることありとす。故に太平無事の日に当たりては、専ら文学^なに志し、義不義忠不中の事、礼儀廉恥^{れんち}の行いを励み、心を鉄石の如くに鍛錬し、尚ほ又常に武芸を遊び、山鷹鹿河漁等をなして身体を剛^{ごう}きようにし、何時^{なんどき}異変の事ありて風雨霜雪に暴露^{そうせつばくろ}しても、善くこれに耐えふる如くし、大將より士卒に至る迄皆此くの如くにして、子路の言の如く、勇ありて且つ方^{ほう}を知らしむること要なり。

嘉永3年8月「武教全書講章」

「訳」

賢明な君主やかしく優れた將軍など立派なリーダーという者は、まず腹を決めるものである。トップの腹が決まれば、部下たる者、どうしてすれに従わないことがあるだろうか。ありはしない。(中略)しかしながら、この決断を下すということは、一時的に心を奪い起こす事で出来ることではない。必ず心や肝を、水が自然にしみこむように少しずつ養い育て、体力・精神力・能力などを鍛えて強くすることによってのみ可能となるものである。だから、平和時には、もっぱら学問に志し、義不義忠不忠とは何か、また、礼儀正しく、潔く恥を知るという生き方に励み、心を鉄や石のように鍛え上げるべきである。また、常に武芸に励み、鷹狩り、鹿狩り、魚釣りなどをして、身体を強くし、いつ異変が起こり、雨風、霜雪にさらされても、上は大將から下は兵卒まで、十分にこれらに耐えられるようにすべきである。「勇ましい心情を持つばかりではなく、人として正しい生き方が分かるようにしよう」という子路の言葉の意味を理解させることが大切である。

*立派なリーダーは腹を決めて決断をする。「勇ましい心情を持つばかりでなく、人として正しい生き方が分かるようにしよう」という子路の言葉をの意味を理解する。

武士一日の事

凡^{およ}そ武士一日の事、諸士^{しよ}に謁^{えつ}し賓客^{ひんきゃく}に対するの外、武芸を習い、武義^{ぶぎ}を論じ、武器を閲するの三事に過ぎず。武士誠に此の三事を以て日々の常識とせば、武士たらざらんと欲^{けみ}すと雖も得べからず。その才不才、智不智に至りては強ひて論ずるに足らず。

「安政3年(1856) 8月「武教全書講録」

「訳」

だいたい、武士の一日というのは、仲間や客に会う以外には、武芸を習い、武士たる意味を考え、刀など、武器の手入れをする、この三つにすぎない。武士が本当にこ

の三つを当然のこととして行っていれば、敢えて武士たらんと願わなくても、当然、武士らしい武士となるであろう。その才能の有無、才知の有無は論ずるまでもない。

*武士の一日というのは三つあり、一、武芸を習い、二、仲間や客などに会う、三、刀など武器の手入れをする。欠かさずやれば立派な武士になるだろう。

己れを成して

士を得るは最も良策。併し士をして吾れに得られしむるの愈れりと為すに如かず。己れを成して人自ら降参する様にせねば行けぬなり。(中略)ひとを結ぶも吾より意ありては遂に長久せず。只だ来る者は拒まず、去る者は追わずにあり。(中略)只だ自力を強くして自ら来る如くすべし。

安政5年(1858) 6月28日「久坂玄瑞宛て」

「訳」

心ある立派な武士を同志として得るのは良策である。しかし、そのような武士に、お前(久坂のこと)から選んでもらえた方がいいと感じさせる方が、より優れている。自分を鍛えて立派な人物とし、人が自分から寄って来るようにしなければいけない。(中略)人と同志になるとしてもお前の意志からでは永続きはしない。主意は、来る者は拒まない、去る者は追わない、ということにある。(中略)ただ、人間としての魅力を鍛え上げ、相手が自分から来るようにすべきである。

*心ある立派な武士は人間としての魅力を持っているから、相手から寄って来るようにする事だ。

深憂とすべきは

深憂とすべきは人心の正しからざるなり。苟も人心だに正しければ、百死以て国を守る、其の間勝敗利鈍ありと云えども、未だ遽かに国家を失うに至らず。

安政2年8月26日「講孟箚記」

「訳」

深く憂うべきは、人の心が正しくないことである。仮にも心さえ正しければ、すべての人々が命をなげうち、国を守るであろう。そしてその間に、勝ち負け、あるいは出来不出来があったとしても、急速に国家が滅亡することは決してない。

*深く憂うべきは、人の心が正しくない事だ、武士は正々堂々と生きるべきだ。

吾が以て待つあえうを待む

兵法に曰く、「兵を用ふるの法は、其の来らざるを待むことなく、吾が以て待つあ

るを恃む。其の攻めざるを恃むことなく、吾が攻むべからざる所あるを恃む」と。

弘化3年5月17日「異賊防御の策」

「訳」

兵法にいう。「軍事において大切なことは、敵が来ないことを期待するのではなく、我が軍の備えが万全であることを頼みとすべきである。また、敵が攻めて来ないことを望むのではなく、我が軍の備えが万全で、攻める事ができない状態にあることを頼みとするべきである」と

*兵法では、敵が攻めても攻めさせない、攻めきれない状態を作る事が大事だ。

父父たり子子たり

乱は兵戦にも非ず、平は豊饒にも非ず、君君たり臣臣たり、父父たり子子たり、天下平かなり。且つ今時の如き平とせんか乱とせんか、当に思ひて得べし。

安政2年11月「講孟筭記」

「訳」

乱とは兵乱をいうのではない。平とは五穀が豊かに実るということではない。君が君としての道を尽くし、臣が臣としての道を尽くす。父が父としての道をつくし、子が子としての道を尽くす時、天下は平らかであるというのである。なお、今の時代は平穏な時であるか、それとも乱世であるか。よく考えて、これを知るべきである。

*乱とは何か、平とはなにかよく考える事だ。

先づ女子を教戒せざんば

女子の教戒の事、先師の深意尤も味ふべし。夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由って生ずる所なれば、一家盛衰治乱の界全く茲にあり。故に先づ女子を教戒せざんばあるべからず。男子何程剛腸にして武士道を守るとも、婦人道を失ふ時は、一家治まらず、子孫の教戒亦廃絶するに至る。豈に慎まざるべけんや。

安政3年8月以降「武教全書講録子孫教戒」

「訳」

女子を教え、戒めることについて、山鹿素行先生の深いお考えを味わうべきである。夫婦は人として守るべき道の大本であり、父子兄弟が生まれ出る所である。だから、一家が栄えるのも衰えるのも、また、世の中が治まるのも乱れるのも、まったくここが分かれ目である。だから、まず、女子を教え戒めなくてはならない。男子がどれほど肝っ玉が据わり、武士道を守ったとしても、女性が婦人としての道を失ってしまえば、一家は治まらず、また、子孫への教えや戒めも絶えてなくなってしまう。どうして慎

まないでよかろうか。慎むべきである。

*夫婦は人として守るべき道の台本であるから、女子の心構えとして、悪い考えは慎むべきである。

積^{せき}盈^{えい}の気^き発^{はつ}す

積盈の気発す

弘化3年5月(甫^ほ田^{でん}先生に^{たてまつ}上^る書)

「訳」

戦闘開始、相手を倒すまで徹底的に戦うのだという気持になる。

*いざ戦いになったら、「徹^{てつ}頭^{とう}徹^{てつ}尾^び」やる気をもって。

男^{だん}児^じと称^たするに足^たらず

龔^{きようしょう}勝^{はんぶんさん}・汜^{はんぶんさん}文^{ぶん}燦^{さん}

餓死と黙死と、天下の苦節と云ふべし。此^かく^{ごと}の如^{ごと}きの真^{しん}骨^{こつちよう}頂^{てい}なくては、男児と称するに足らず。

安政6年5月

「訳」

龔^{きようしょう}勝^{はんぶんさん}の餓死といい、汜^{はんぶんさん}文^{ぶん}燦^{さん}の黙死といい、苦しみの中にあっても節操^{せつそう}を変えない、あつぱれな生き方というべきである、このような、真骨頂とするものがなくては、男児と称するにたりない。

*苦しくとも、節操を変えない事が本当の男児である。

其^その業^{ぎよう}に達^{たつ}せざれば

文武は士の業なれば、士として其の業に達せざれば士とすべかれず

安政4年(1857) 3月「吉田録」

「訳」

学問と武芸は待たるものの務めであれば、侍としてその技芸に深く通じていないようであれば、侍とすべきではない。

*文武両道の考えを持たねば、・・・・・・・・

天下^{おのれ}国家^{ゆう}己^{あら}が有^あに非^ひず

和^わ漢^{かん}共に世を継ぎて天下国家をしらしめす人は、天下国家己^{すなわ}が有^そに非^ひず。乃^{すなわ}ち祖^そ

宗^{そう}聖明、天命を受け人心に^{したが}順^{せんしんばんく}ひ、千辛万苦して創業する所なり。後世子孫よく祖^{ちぎょう}宗の心を^{けだ}休^{たいとう}し思ふべし。蓋^{いやしく}し天下国家は自ら体統あり、苟^{やすらぎ}も一朝一夕の安^{ぬす}を偷^がみ、外夷^{がい}の辱^{はづかしめ}を受け、(中略)国体を失はば、たとへ数十年国脈を永くすとも祖宗喜ばるべくや。若しくは祖宗以来の国体を確乎^もとして変ぜず、たとえ叶^{かつ}ひ嘆^こき合戦なりとも、君を初めて臣下ともに命かぎりに討死し、少しの恥辱^{ちじよく}をも蒙^{ちようむ}らずんば、たとへ数十年の国脈を縮むとも祖宗怒るべくや。国体を失うものは、祖宗いかばかり怒らるべし、恥辱を蒙らざるものは、祖宗いかばかり喜ばるべし。是れを人臣の事に比せば自ら^{ぶんめい}分明ならん。若し暴乱の世に仕ふるもの、吾が録は先祖以来の知行なり、少しも傷つけば不幸なりとて、面諛^{めん}因循^{いんじゆん}して苟^{いやしく}も容れらるることを取り、直諫^{ちよくかんとうげん}謙言せずば、寵^{ちようえい}榮せられて身を全きに終ふるとも、聖道の容さざる所なり。又君臣の義を重んじ、忠^{ちゆうかん}諫して少しも曲^つげず、終に家絶え身亡ぶとも必ず云はん、世録^{せろく}の士さこそあるべきことと、国君の社稷^{しゃしよく}の爲にする、人臣の国君の爲めにする。理は一なり・

嘉永3年(1850)8月「龍城の大將心定の事」

「訳」

我が国及びシナ共に、君主の位を受け継いで、天下国家を治める人にとって、天下国家は私有物ではない。つまり、始祖の君主が天の命を受け、国民の心に従い、多くの辛苦を経て、お創りになったものである。後の世の子孫は、始祖の心をいつも自分の心に留めて想うべきである。確かに、天下国家というものには、大切な体裁や伝統、つまり、あるべき様というものがある。かりにも、一時の安寧を求め、その結果、外国の侵略を受け、(中略)また、国家のあるべき様を失うようなことがあれば、たとえ数十年国の命脈が続いたとしても、どうして、始祖はお喜びになるであろうか。お喜びにはならない。また、始祖以来の国体をしっかり堅持して変えず、たとえ勝てる可能性の少ない戦いであつたとしても、君主を始め臣下共々一丸となって命の続く限り戦い、その結果討死にしても、少しでも恥や辱めを受けないのであれば、たとえ数十年、国の命脈が縮まったとしても、どうして始祖がお怒りになるであろうか。お怒りにはならない。しかし、国としてのあるべき様を失ってしまえば、始祖はどれほどお怒りになるであろうか。逆に恥や辱めを受けないのであれば、始祖はどれほどお喜びになるであろうか。これは人の臣たる者のあり方になぞらえてみれば明らかである。もしも、大変乱れた時代に臣下としてお仕えする者は、「今いただいている俸禄は先祖以来のものである、少しでも失うようなことがあれば不幸である」として、上司に媚びへつらい、古い前例にこだわり、その場しのぎに終始し、上司に気に入られるような事ばかり行い、不正を見つけてもすぐに諫言せず、また、正しい道を述べないようであれば、君主の恩寵を受けて榮え、大過ない人生を送ったとしても、聖人としての尊い道が決して許さないものである。また、君臣の義を重んじ真心から諫言して少しも遠慮せず、その結果ついに家が絶え、その身が滅んだとしても、人々は必ずいうであろう、「世襲の家禄をいただいて来た侍は、まったくそうあるべきである」と、国家の君

主が国家のためになすこと、また、人臣が君主のためになすこと、道理は一つである。

＊天下を治める人にとって、天下、国家は私有物ではない。国家の在るべき姿とは何か？「君主」が国家の為に成す事は何か、「人臣」が君主の為に成す事はなにか？道理は一つしかない。

原文訳 川口雅昭

あとがき

最後に松陰が詠んだ詩は遺言である、「留魂録」を死ぬ前に書き上げ、江戸伝馬町の処刑場に行くまえに、同じ牢屋で過ごした人たちへの別れの挨拶のかわりに、辞世の詩を高らかに吟誦した。

「身はたとひ武蔵野の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」

たとえ、私は死んでも、国を思う私の気持ちだけは永遠に残しておきたい。と、云う意味で「留魂録」を残した。そして、のちの、高杉晋作、久坂玄端、前原一誠、伊藤博文、品川弥二郎らの維新の志士たちの精神支柱となった。

「武道初心集」に「人の命の無常を、取り分けて武士の命の無常さを思え。かくして汝は日々、おれ汝の最期と考え、汝の義務をみたんが為、日々をささげるに至ったのである。

死を覚悟するという事は、あるいは、死ぬことと見つけたりとは、死を美化する事ではない。そうではなく、死を覚悟する事によって、逆に死の恐怖（実際には自我の恐怖）から解放され、何事であれ、徹底した人生を送る事が出来るという事を言っているのである。

松陰先生は、学問とは、志しを持って行動に移してこそ学問だと言っているが、私自身も、行動に移す事には中々ちゅうちょしてしまう。しかし、行動の前に、自分自身を鍛えて、家族を守り、組織を衛り、国を護る精神だけは持ちたいものである。

＜ 参考文献 ＞

月刊日本	南丘喜八郎	吉田松陰	池田論
武教全書講録	川口雅昭	松陰読本	山口県教育会
吉田松陰	川口雅昭	講孟割記	近藤啓吾